

汐入りの庭園だった名勝 旧芝離宮恩賜庭園



大名庭園の松

松

松は、日本文化を象徴する樹木といつてもよく、格調をもった庭木として日本庭園には欠かせない。

「門松」と「松の内」お正月に関係が深く、常緑樹として冬も緑の葉を茂らせることから、若さ・不老長寿の象徴とされている。羽衣伝説など、松に係わる伝説も多い。

「門松」と「松の内」

旧芝離宮恩賜庭園

JR浜松町に隣接した都立庭園で、港区海岸に所在。名勝指定。徳川幕府の老中・大久保忠朝が芝金杉の地を拝領して屋敷を構えたのは、延宝六年（1678）のことで、貞享三年（1686）屋敷内に作庭して「楽寿園」と呼んだ。後に持ち主は変わり、紀州徳川家の別邸となつて芝御屋敷と称されたが、明治八年（1875）皇室が買上げ、翌年芝離宮となった。大正十三年（1924）昭和天皇の御成婚を記念して東京市に下賜され、公開された。

浜離宮恩賜庭園

東京湾から海水を取り入れ潮の干満で景色の変化を楽しむ、潮入りの回遊式築山泉水庭。江戸時代に庭園として造成された。園内には鴨場、潮入の池、茶屋、お花畑、ボタン園などがある。

もとは甲府藩の下屋敷の庭園だったが、宮内省管理の離宮を経て、東京都に下賜され都立公園として開園した。

江戸幕府が開かれて暫くは將軍家の鷹狩の場であったが、承応三年（1654）に甲府藩主の徳川綱重がこの地を拝領し、埋め立てて別邸を建てた。その後は甲府藩の下屋敷として使用された。そのため甲府浜屋敷、海手屋敷と呼ばれるようになった。

JR浜松町駅付近・右下は浜離宮・左上に芝離宮



浜離宮庭園の黒松



浜離宮庭園は・・・

市民プレス



SHIMIN PRESS

1月5日 第47号

発行人 特定非営利活動法人「市民フォーラム」
編集人 原 昭二
制作・印刷 デジタル工房
FAX 048 (476) 9111
〒353-0004 埼玉県志木市本町 5-19-15

市民の目線で市民が発信する地域情報紙
WEB SHIMIN
<http://shimin.camelianet.com>

CONTENTS

- PAGE 1 松 大名庭園 芝離宮・浜離宮
 - ◇「志木のまち案内人の会」活動報告
- PAGE 2,3 柏の城とその時代 西田憲正
- PAGE 4 志木第九の会 第14回定期演奏会
 - パッサ：カンタータ
 - モーツァルト：レクイエム
 - ◇第13回「わがまち新座」写真展

三百年の松 浜離宮



「志木のまち案内人の会」活動報告

志木のまち案内人の会
会長 一ノ倉達也記

遂に、第二回目の、「志木のまち案内人の会」としての、一般応募の方への「志木のまち案内」を行うことが出来た。市教育委員会ご後援のもと、市生涯学習課の応募対応のご協力を頂いて、11月22日（日）朝9時30分志木駅北口丸井前広場の交番前に、お客様さま13名をお迎えし、当会会員は神山顧問を始め計13名が参加、合計26名で、12時30分、旧村山快哉堂前にて解散するまでの約3時間、かねてより準備した紙芝居式説明写真を示したりしながら、下記のコースをご案内した。

当日は、天気晴朗に非ずして、雨模様の寒い日ながら、当会会員は意気軒昂、一方、お客様には、生憎の天候ながら、志木の歴史を示す史跡・文化財についての私共の説明に、初めて知ったということも多々有ったものと拝察され、やや長時間ながら、第二回目としては成功だったと、自己採点している。

赤松と洋館

国の登録文化財 朝日屋原薬局



今回は、深瀬氏を中心に、場所・テーマにより、四人が説明を担当し、会員全員協力の下に、お客様が安全に楽しめるように努力した積もりだが、狭い歩道や、自転車の通過、横断歩道などの問題もあり、説明場所が、必ずしも安全且つ十分に確保されない所もあり、又、トイレや休憩時間の課題等もあった。

今後、皆様のご批判・ご指摘も頂きながら、この第二回目の経験を基に、私共の案内の在り方を、会員一同で更に研究・検討し、皆様に、より楽しんで頂けるように改良し、努力していきたい。



柏の城とその時代

西田 憲正

はじめに

志木市に住み続けて30年、私の人生の中で一番長く住むところとなった。この街は川と自然と歴史のある街である。この街の中に柏の城跡がある。日本の中世に興味と関心を持つものとして、なぜかこの「柏の城跡」に惹かれるものがあった。長いあいだ城跡付近を散歩しているうちにいつしかこの柏の城について考えてみたい気持ち



が強くなり、幸い今回のチャンスを与えられ調べてみることにした。

調べていると享徳の乱、長尾景春の乱、山内上杉と扇谷上杉の抗争、北条一族の拡張などなど中世の関東の動乱は激しく、山内上杉の重臣である大石一族が治める柏の城もこの混乱の中にのみ込まれていったに違いないと思

うに至った。柏の城の周辺の河越城、岩付(岩槻)城、難波田城そして江戸城も同時代同じような運命に直面したと思われる。しかも動乱の中でその攻防が荒川(当時の入間川)、新河岸川、柳瀬川ともかわつていたのであろうと思うようになった。

それにしても「柏の城」に関する史料は少ない。この柏の城の存在、築城の時期、繁栄や落城の様相など謎につつまれている。大きく流れる歴史の中から探るようにして記述してみた。

1 柏の城とは

(1) 武蔵国の中の柏の城

もともと武蔵国は鎌倉時代から軍事戦略的に重要な国であった。武蔵、相模、上野、下野、下総、上総、常陸、安房、甲斐、伊豆の10カ国と言われそれぞれ守護がおかれていた。武蔵国を鎌倉から見ると関東の中心地であり、関東

各国から鎌倉に行くには、街道いりゆる鎌倉街道を通じて行くことになり戦略的に極めて重要なところであり鎌倉時代には北条得宗家の領国であったという(田辺久子氏『上杉憲実』)。

南北朝から室町時代に入り足利幕府成立後は鎌倉に

関東公方を置いてここに関東の政治を任せる方式をとっている。その意味では、いよいよ武蔵国は関東の中で重要な地位を占めるようになっていった。

そのような武蔵国の中にあつて、室町中期まではこの重要な地域を関東管領山内上杉氏が守護となり長い間統治した。そしてこの武蔵国の守護代として実質的に支配したのが大石氏である。大石氏は

長尾氏と共に山内上杉を支える重臣で、その勢力は強力であり、関東管領山内上杉憲実の時代には武蔵国を実質的に支配しており、そのとき大石氏は、大石信重(7代)、大石憲重(8代)、大石憲儀(9代)の3代にわたつて武蔵国の守護代として活躍したと言

う(田辺久子氏『上杉憲実』)。

本拠地を八王子に置く大石氏であるが、時代の変化とその勢力

圏の変化により守護代として武蔵国をきちんと守り治めることが難しい時代、即ち関東動乱の時代を迎えることになる。この動乱期には大石房重、顕重、定重の三代を経て定久の代をむかえ、大石一族が活躍している(杉山・栗原氏『大石氏の研究』)。柏の城の歴史は大石一族の歴史であるともいえる。

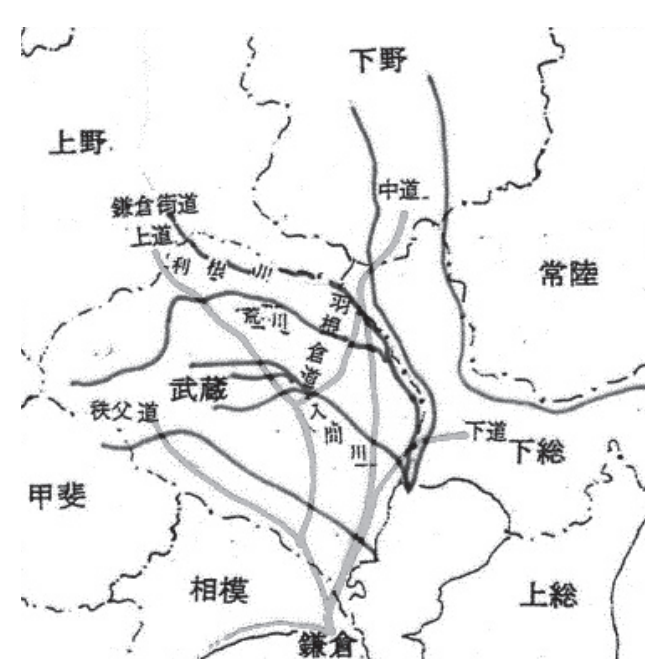
また武蔵国の東北には柳瀬川、新河岸川、荒川(当時入間川)、そして利根川があり、これらの川は交通、軍事(防衛)の両面で重要な要素を占めている。特に新河岸川と荒川は中世のこの時代から舟運が始まっていたのではないかと

思われる。文明18年(1486)に美濃から北陸路を経由して武蔵国を巡り北国に向かった荒恵の旅日記である『北国紀行』に「よふかき道をくるに人間の船渡りまで、みおくる人あまた侍り詞に、角田川の朝きりいつこをほとりともしらす、小船のいきちかふかひの音の身にしみて・・・」

とあり、入間川から隅田川へ船旅(舟運)が行なわれていたと思われる。柏の城はいつの時代、誰が何の為に築城したのだろうか。研究してみたい好奇心に駆られて久しい。『柏の城』については『新編武蔵風土記稿』に「古跡」として城跡のことが記録されており、『館村旧記』にも「当所柏城文明年中の

比、田面長者の住居ありし跡を城に築きて大石信濃守居城となれり・・・」とある。さらに道真准后の『廻国雜記』には、大石信濃守(顕重)の館として柏の城とおぼしき館が記されている。

「柏の城」は中世に築城されたと言われその跡が今も残っている。東武東上線柳瀬川駅から歩いて10分ほどのところに城跡がある。『館村旧記』には「柏の城」という名称そのものが記載されており、柳瀬川から切り立った崖の上現在



中世の関東諸国と武蔵の国と水路と陸路(『荒川』『中世社会と荒川』を基に加筆作成)

の志木第三小学校)に本丸があつたといわれる。この城は三方を柳瀬川と湿地帯に囲まれ天然の要害となつていたといわれ、今でも柳瀬川の堤防から眺めると当時の様子が目に浮かぶ。中世は川の様子も湿地帯の様子も現在とは異なり、もつと川が広く遊水地を含み、湿地帯が広くこの皆をとり巻いていたであろうことは想像がつく。

『館村旧記』によると、この城は二町半、二町(東西250メートル、南北200メートル)の長方形で、本丸は志木第三小学校の校庭のところにあつたといわれ、現在、校門の横に「柏の城跡」の表札(志木市教育委員会)が立っているのみで本丸の当時の様子を想像するには困難である。西側に西の丸、東側に三の丸があつたといわれる。南側の二の丸の外側に大きな堀があり幅12・2メートル、深さ4・7メートルといわれ、昭和55年の発掘調査で実証されている(『志木市史』中世資料編)。

西の丸は現在の旗桜(樹齢400年)のある付近にあつたといわれ、さわらの大木と桜の樹とその他の樹木とから当時の様子をかすかに想像することができる。

2 関東の対立抗争

(1) 山内上杉、扇谷上杉、古河公方の対立抗争

この対立の時代が何時頃どのようにして始まったのか。関東管領山内上杉(室町幕府と協力)と鎌倉公方足利持氏との対立があり、この対立で上杉憲実が足利持氏を1439年に滅ぼしてしまう。その後関東管領山内上杉の勢力はしばらく安定してゐるが、足利義政將軍の死により再び乱れることとなる。そして足利成氏の時代

りわけ大田道灌の勢力が飛躍的に拡大した。この大田道灌の勢力拡大を嫌った扇谷上杉定正は大田道灌を文明18年(1486)に暗殺した(黒田基樹氏『扇谷上杉氏と大田道灌』)。そのあと扇谷上杉と山内上杉の対立抗争の時代となる。これら一連の戦乱の中にあつて柏の城はどのような状況であつたのだろうか。

『廻国雜記』によると道真准后が大石信濃守(顕重)の館を訪れたのは文明18年(1486)。そのとき柏の城は存在していたこと



現在の西の丸跡

となると持氏時代の家臣が集結、成氏を担いで再び勢力の拡大を図る。その後、扇谷上杉が勢力を拡大してくる。一方、山内上杉は上杉憲実退陣後、ひとり置いて上杉憲忠が関東管領となるが、その上杉憲忠が足利成氏に暗殺される(1454年)、再び対立抗争の時代が継続する。これが世にいう享徳の大乱の始まりである。この1454年(享徳4年)以降に上杉対古河公方の対立抗争が続くことになる。

その後、長尾景春の乱が起こり大田道灌は山内・扇谷上杉と協力してこの乱を鎮めた。この乱により扇谷上杉の勢力は拡大、と

になり、それ以前のしかるべき時期に既に築城されていたことになる。時期的にみても地理的にみても古河公方対策に作られたと見られる。この地域は荒川(当時入間川)、新河岸川、柳瀬川の押さえ、軍事と交通の双方で活用できることも重要な地域であつたとおもわれる。『館村旧記』にも文明年間に柏の城築城と記載されている。

(2) 北条一族の関東進出

応仁・文明の乱から戦国時代に入る頃になると伊豆でその勢力を台頭してきた北条早雲(後北条)が扇谷上杉と山内上杉の対立抗争に乗じて永正10年(1510年)

JOHANN SEBASTIAN BACH + WOLFGANG AMADEUS MOZART

KANTATE BWV 4 + REQUIEM KV 626

志木第九の会

第14回 定期演奏会

J.S.バッハ カンタータ 第4番
W.A.モーツァルト 《レクイエム》

ソプラノ：藤崎 美苗
アルト：佐々木 昌子
テノール：初谷 敬史
バス：初鹿野 剛
オルガン：矢内 直子

管弦楽：東京ニューシティ管弦楽団
合唱：志木第九の会合唱団

音楽監督・指揮：三澤 洋史

2010年2月7日(日) 2:00P.M.開演 志木市民会館パルシティ

共催：(財)志木市文化スポーツ振興公社 入場料：2,500円

後援：志木市／志木市教育委員会 協賛：株式会社ジェイコム東上

「志木第九の会」 定期演奏会

2月7日(日) 午後二時開演

曲目

J.S.バッハ カンタータ第四番
W.A.モーツァルト レクイエム
管弦楽：東京ニューシティ管弦楽団

合唱：志木第九の会
音楽監督：三澤 洋史

会場：志木市民会館パルシティ

共催(財) 志木市文化スポーツ振興公社・後援：志木市／志木市教育委員会・協賛(株) ジェイコム東上 入場料：2,500円

志木第九の会では16年ぶり二回目の「モーツァルトのレクイエム」の演奏で、今回も心のこもった演奏が期待される。

総監督の三澤さんは、現在新国立劇場合唱団指揮者として知られるが、招かれて志木市まで足を運ばれ、「志木第九の会」の指導をして下さるので、有難いことに志木の市民にとっても馴染みの方になった。ほとんどが素人の合唱団のメンバーに対して、技術的な指導は勿論、全てのメンバーが一体となつて聴衆に感動を与えるよう心構えを説かれ、懇切な指導をされている。年末の合唱の練習は市



肖像画 (1746)

ヨハン・セバスチアン・バッハ (1685～1750)

カンタータ第4番「キリストは死の縄目に掛けられた」BWV 4

200曲あるバッハの教会カンタータのなかでも最初期、おそらくバッハ20代の初めに書かれた作品であるが、すでに強い表出をもち、厳密で密度が高く、独特の魅力で古くから愛好されている。教会では復活祭の第一目に演奏される。

民に公開され、三澤さんの厳しく、また楽しい練習の光景を目のあたりにすることができた。今度の定期演奏会当日には、10時から12時ころまで、「リハサル見学会」が、中学生、高校生に無料で公開されるという。まさに快挙というべきであろう。

歌詞は宗教改革の立役者マルティン・ルター作のコーラルからとられ、曲の前半でイエス・キリストの受難(死)を考察し、最後の2節で復活を高らかに歌い上げている。復活祭の深い喜びが、しみじみと感ぜられる。



死後画かれた肖像 (1819)

W.A.モーツァルト (1756～1791)

ミサ曲は、カトリックの儀式用の曲で、キリエ、グロリア、クレド、サンクトゥス、アニュスデイ、の五部で構成される。「レクイエム」は、死者の鎮魂ミサ曲ともいわれ、亡くなった者を神のもとへ送ろう、という葬送曲であるが、モーツァルトの「レクイエム」二短調 KV 626は、彼の最後の作品である。

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト Wolfgang Amadeus Mozart はウィーン古典派の巨匠であるが、この曲は死の直前に作曲に取り掛かった作品として知られる。大部分は未完のまま残されたが、弟子のジュスマイヤーたちが残る部分を補作した。しかし完成した作品はまぎれもなくモーツァルトの音楽で、古今の「レクイエム」の中でも最高位にランクされている。

三澤総監督の指導で合唱の総練習 (12月20日)



一昨年の第13回定期演奏会「ドボルザーク「スターバート・マール」」の舞台風景

勝鬨橋から千住大橋までの13橋梁の空撮と、兩岸300年の歴史を綴り、橋梁の構造を分かり易く説明した新しいガイドブック

CREATIVE BOOK
首都圏人 No.10

隅田川を遡る

橋梁物語
はしものがたり

編集 NPO市民フォーラム 発行 (株)ヒューマン・クリエイティブ



新書判 240ページフルカラー
定価 本体1,200円＋税



江戸時代には浮世絵の背景として、また明治になると小説の舞台となった隅田川。洪水や大火・戦火を乗り越え、兩岸は整備されて散歩が楽しめるテラスもできた。絶え間なく建設される高層ビル群と相俟って、それぞれが個性をもった橋梁は、新しい景観美を形成しつつ人々に安らぎを与えている。

勝鬨・永大・清洲橋は国の重要文化財に指定されている。いずれも当時の最先端の技術を駆使して建設され、技術史上高い価値をもつ。

本書は隅田川を遡り、勝鬨橋から千住大橋にいたる十三橋梁の景観を空撮で楽しむ。また兩岸の史跡を訪ね、江戸時代の「大川端」から現代の街角まで、三百年の歴史を綴り物語りである。大火、地震の災害、戦争の大きな傷跡が残る。本書ではこれらをも大きく包み込み、新旧多彩な写真を添えて隅田川の歴史を語る。橋梁の構造を分かり易く説明した新しいガイドブック。

ようらんしゃ 八王子市追分町10-4-101 TEL042-620-2615 FAX620-2616
揺籃社 http://www.simizukobo.com/ E-mail:info@simizukobo.com

地域情報

第13回「わがまち新座」写真展

新座の今を明日のあなたに・・・

会期：平成22年2月7日(日)～13日(土)
会場：にぎほつとぶらさ 3階ギャラリー

主催：新座写真クラブ交流会

後援：新座市・新座市教育委員会・新座市文化協会
連絡先 Tel:048-477-0379

藤井教文(Photo2000代表)

畑中写真同好会

Gセブン

MASAKA写真クラブ

写光会

フォト・セブンセブン

Photo2000

フォトサークル虹



お知らせ

このたびニュータイムス社のご好意により、同社の情報誌「ニュータイムス」をご購読されている読者に、本紙「市民プレス」を同梱・配布して戴くことになりました。お申込みは「ニュータイムス社」へ。

TEL 048-486-6138
FAX 048-471-3240
E-mail: newtimes-net@nifty.com



本紙「市民プレス」は
年四回(二、四、七、十月、
各月五日)発行。

特定非営利活動法人 NPO「市民フォーラム」

この法人は地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によって市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

地域情報紙「市民プレス」はNPO市民フォーラムが編集・発行し、無料で配布しています。読者の「オピニオン」(意見・感想)をお寄せ下さい。

TEL090(3048)55002
編集部 原宛にどうぞ

右は「ニュータイムス」最新号

